

今週の為替相場見通し(2020年8月3日)

総括表		先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	
米ドル	(円)		104.20 ~ 106.20	103.80 ~ 106.30
ユーロ	(ドル)		1.1640 ~ 1.1908	1.1600 ~ 1.2000
(1ユーロ=)	(円)		123.00 ~ 125.20	123.00 ~ 125.50
英ポンド	(ドル)		1.2785 ~ 1.3170	1.3000 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	135.15 ~ 139.20	137.50 ~ 140.00
豪ドル	(ドル)		0.7087 ~ 0.7227	0.6900 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	74.83 ~ 75.92	73.00 ~ 76.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 103.80 ~ 106.30 円

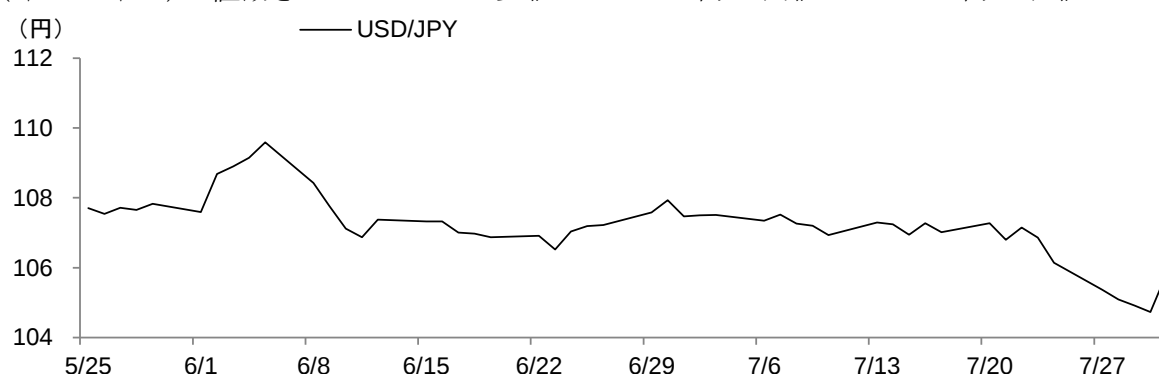
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場はドル安が進展する展開。週初27日106円ちょうどでオープンしたドル/円は仲値にかけて一時週高値の106.20円をつけたが、その後はじり安の展開となる。米中対立の激化、米国での新型コロナウイルス感染拡大、金価格の史上最高値更新によって、ドルが売り込まれた。28日は日経平均株価や中国株の上昇を眺めて底堅く推移。金先物価格の上昇が一服した中で、一時105円台半ばまで回復。米国時間に米株先物が軟化する動きを受けた円買いが強まった上、その後発表された米7月消費者信頼感指数が前回から大きく低下し予想も下回ったことを受けて、ドル/円は一時105円を下抜けた。29日は、財務省幹部による円高を警戒する発言が伝わって小幅に値を戻したが、ドルが対ユーロで売られ、再び105円を下抜ける展開。FOMCでは声明文内に特段驚くような内容はなく、パウエルFRB議長の記者会見では、引き続きハト派な姿勢が示されると、ドル売りが持ち込まれ104円台後半での値動きとなった。30日は米4~6月期GDPの大幅減速が報じられ、追加の景気対策案が共和党と民主党の間で合意に至らなかったことが嫌気されて上値の重い推移となった。31日は日本時間の午前中に更に値を下げ、一時週間最安値となる104.20円をつけるも、その後は月末のリバランスによるドル買戻しの思惑に値を戻す展開となり、一時106.05円をつけ、105.92円で超週した。

今週のドル/円相場は、引き続き下落リスクを孕んだ上値の重い展開を予想する。新型コロナウイルス第二波リスク・米中対立の激化、米大統領選に関するヘッドライン等、依然として市場に色濃く残っているドル/円相場の下落が想起される多くの不安材料が、ワクチン開発に関するヘッドライン・世界的な景気対策に対する期待感等を上回り、更なる下値を試す展開も想定しておきたい。重要指標の発表は、3日(月)に日米の製造業PMI、米ISM製造業景況指数、5日(水)に米貿易収支、米ISM非製造業指数、6日(木)に米新規失業保険申請件数、7(金)に米非農業部門雇用者数変化、米失業率の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/27~7/31)の値動き: 安値 104.20 円 高値 106.20 円 終値 105.92 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.2000 123.00 ~ 125.50 円

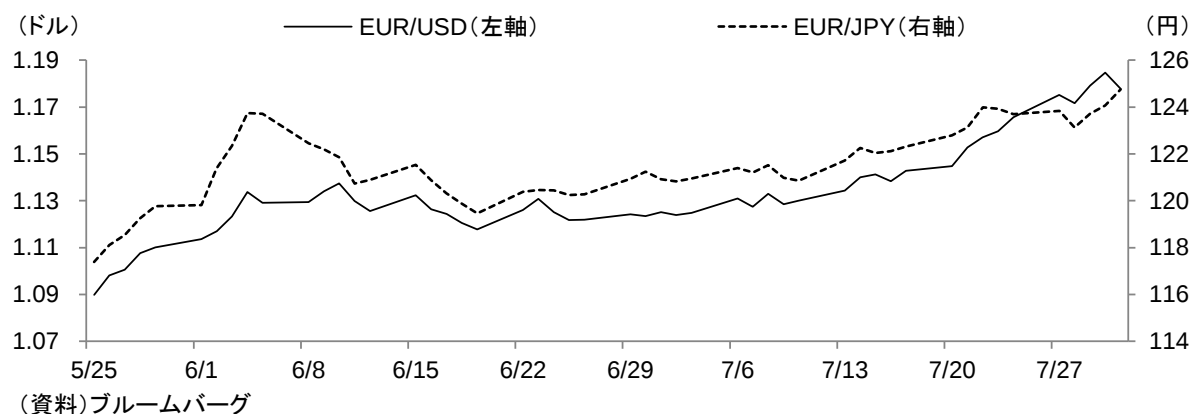
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロは、大きく上昇する展開。週初27日、1.16台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、急速なユーロ買いドル売りの動きが継続し、1.17台後半を堅調に推移。28日は金価格が反転下落する展開に、ドル買いが持ち込まれたことから、一時の1.1699まで下落した。その後、ドルの買い戻しは後退したが米株式市場が軟化する中、ユーロ/円が下落する動きにユーロ/ドルも上値を抑えられ、1.17台前半の推移が続いた。29日はFOMCの結果発表を控え、ドル売りが海外市場で強まったことから、ユーロ/ドルは1.17台後半まで上昇した。声明文発表後も再びドル売りが優勢となり、パウエルFRB議長のハト派姿勢が確認されると更に上伸し、一時1.18台に到達した。30日は米4~6月期GDPの結果や米国の追加景気対策が決まらず、じり高の展開が続いた。31日はドル売りの流れが継続し週高値となる1.1908をつけたが、欧州圏第二四半期GDPが過去最大の減少となったこともあり、下落に転じ、1.17台後半で越週した。ユーロ円は123円台半ばでオープンし、対ドルでのユーロ買いを受けて上昇。28日にはドル円が下落する動きにユーロ円も週安値となる123円ちょうどまで下落したものの、その後はユーロドルの上昇の動きを受けて堅調推移。31日に週高値となる125.20円をつけた。引けにかけてはドルの買い戻しが入り、124円台後半で越週した。

今週のユーロは底堅い動きを予想する。欧州復興基金の合意に加え、米指標の悪化や米中関係の悪化等を背景に、ドル売りが継続し、ユーロドルは2年超ぶりの高値をつけた。米国では新型コロナウイルスの感染再拡大が懸念される中、今週は米国で重要経済指標の発表が相次ぐ予定であり、米指標の悪化がみられる場合には、一段とユーロドルが上昇すると予想する。ただ、米国内で協議が難航している追加経済対策について前向きな報道が出る場合にはドル売りの流れに調整が入る局面もありそうだ。一方ユーロ円はドル円の上値の重い動きにつられる動きを予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/27~7/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.1640 高値 1.1908 終値 1.1776
(対円) 安値 123.00 高値 125.20 終値 124.69



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3200 137.50 ~ 140.00 円

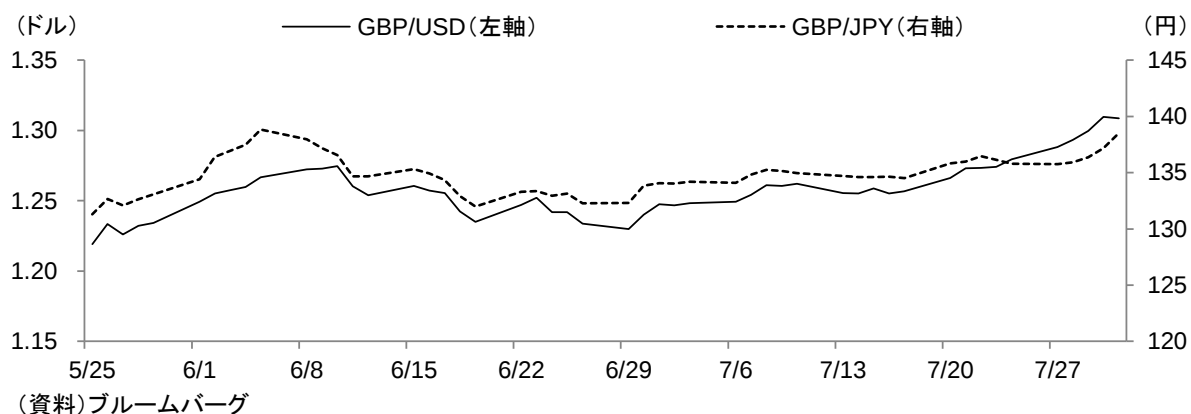
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上昇。先週の主要通貨市場はドル全面安と言えるもので、対ドルでのポンド上昇もその概ねはドル安の裏返しと言えた。ただ、28日以降、ポンドが対ユーロ、対円でも明確に水準を切り上げた事実は、ポンド固有の買い要因の存在をはっきりと示唆した。ドル全面安の要因には、米の一部の州におけるコロナ禍再燃に対する懸念や、29日の米連銀公開市場委員会を前に、同連銀が緩和的姿勢を維持するとの思惑(実際にその通りの結果となった)が挙げられたが、根底にあったのは、引き続き財政投入と量的緩和(資産購入策)の組み合わせによる「ドル余剰」と言える状況を、米当局が積極的に演出していた事実と思われた。この間も、1兆ドル規模のコロナ対策(第4弾)成立の可能性が盛んに観測された。一方でポンド固有の買い要因だが、残念ながら決め手となるような要因は見出せなかった。英経済指標で目を引く内容のものがあってもない。EU離脱後の将来関係交渉に関しても、EU側のバルニエ首席交渉官から「合意を確信している」との発言が聞かれたものの(27日)、従来通りの楽観と言え、具体的な進展があったわけでもない。敢えて挙げるなら、31日に発表されたネーションワイドの7月住宅価格指数が予想外に明確な上昇に転じた事実は、週引けに掛けてのポンド高加速を後押しした可能性も考えられたかもしれない。

今週の英ポンド相場は、上値の重い膠着を予想。対ドルで1.32、対円で140円といった、それぞれ直近高値水準を明確に上抜ければ、もう一段のポンド上昇に弾みがつく可能性も考えられる。その場合、対ドルで1.35、対円で145円といった水準を視野に入れることになるだろう。しかし、テクニカルな要因以外に、そこまでのポンド上昇を支持する要因を思いつかない。コロナ禍動向という目線で、英は、米、スペインなどと並んで収拾の目途の立たない国のひとつだし、その経済的打撃という意味でも、他主要国との比較で抜きん出た点は全くない。マイナス金利導入観測が燐り続ける英中銀の金融政策動向にも、特筆すべき点はないだろう。更に、EU離脱後の将来関係交渉は、EU次世代基金(コロナ復興基金)成立という華々しい成果のあと回しにされ、見るべき進展を見せないまま移行期間の終焉(2020年末)だけが確実に近付いている。もっとも、これだけの悪条件が揃っていても、将来関係交渉の遅滞を除けば、その他の条件は他国・経済と似たりよったり。したがって、上述直近高値の上抜けに失敗したとしても、それがすぐさまポンド急反落を招くような展開も考え難いだろう。英固有の要因では、6日(木)の英中銀金融政策委員会が注目される。マイナス金利導入に関する議論が聞かれる可能性もあろうが、ホールデン委員が述べていたように、少なくとも現状では、「議論は議論、実施とは別」との整理がなされる可能性が高かろう。追加緩和の可能性としては、むしろ資産購入額上限(現状7,450億ポンド)引き上げの可能性の方が高いものと見る。この間のドル全面安の要因が、仮に、上述したように、積極的な財政出動(コロナ禍対策)と国債購入でそれを支える中銀の組み合わせにあったのだとしたら、英はその組み合わせを最も積極的に活用している国のひとつ。米のケース(1兆ドルの追加財政政策とドル安)がなんらかの参考になるなら、ポンド安要因と読まれる可能性が警戒されよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/27~7/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.2785 高値 1.3170 終値 1.3084
(対円) 安値 135.15 高値 139.20 終値 138.49



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 0.6900 ~ 0.7200 73.00 ~ 76.50 円

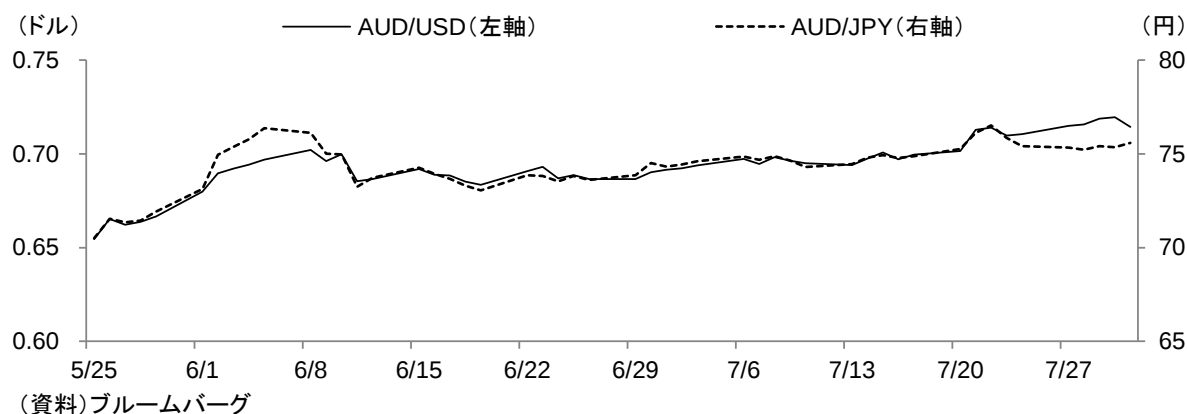
(2) ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、27日に0.7097で取引開始後、米株先物が上昇する一方米ドル売りが持ち込まれ、豪ドルは上値を迫る展開となった。FOMC開催に先立ち米当局による緩和姿勢継続のハト派的姿勢が強調されるとの見方が強まり、米ドルが他通貨で下落、また、米実質金利が大幅に低下する中、豪ドルは0.7150まで上昇した。28日は株価上昇を横目に買いが優勢。その後急伸していた金価格が利食い売りに反落するとドル買いの展開となり、一時0.7110台まで下落した。NY時間に発表された米7月消費者信頼感指数が予想以上に低下したことを受けてドル売りが持ち込まれると、じりじりと値を戻し0.7160近辺で引けた。尚、9月末に期限切れとなる緊急融資プログラムを12月末まで延長することをFRBが発表した相場の影響は限定的であった。29日は発表された豪第2・四半期CPIが前期比は▲1.9%(実績) vs ▲2.0%(予想値)、前年比は▲0.3%(実績) vs ▲0.5%(予想値)と予想値を僅かに上回ったものの、新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた州境封鎖や人の移動・経済活動を制限する措置、並びに原油価格の急落等から今後に向けたインフレ圧力は弱気なものとなり0.7165近辺から0.7150近辺まで下落。対円でも75.35円から75.17円近辺まで下落した。30日には発表された米第2四半期GDPや米新規失業保険申請件数が米経済の回復を遅延させるような内容だったことでドル売りが再び加速。0.7135から0.7160近辺まで上昇した。この他トランプ大統領が「安全な投票が可能になるまで大統領選挙を延期してはどうか」とツイートしたこともドル売りを後押しした模様。豪ドルは前日の高値を更新し、0.7198まで上昇した。31日は全面的な米ドル売りに豪ドルも上昇。一時17ヶ月振りの高音である0.7227まで上昇している。

今週の豪ドルは上値の重い展開を想定。新型コロナウイルスの第2波の影響はオーストラリアでも広がっており、先週にはメルボルンなど主要都市を擁するビクトリア州では新型コロナウイルスの感染者数が過去最多を記録した。州首相からはロックダウンがステージ3からステージ4に引き上げられる可能性も示唆されているが、ステージ4では薬局やスーパーマーケットを除く全ての営業が停止されるため経済への影響は避けられない。豪中関係についても不安は続く。米英を中心にファウエイの完全排除を話し合っているが5EYESの同盟である豪州も中国への厳しい姿勢を取らざるを得ない。通商面で密接な豪州にとって豪中関係の悪化は豪ドル売り材料となりやすい。今週は4日に6月貿易収支、小売売上高、7日にRBA議事要旨公表が控えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/27~7/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.7087 高値 0.7227 終値 0.7143
(対円) 安値 74.83 高値 75.92 終値 75.59



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。